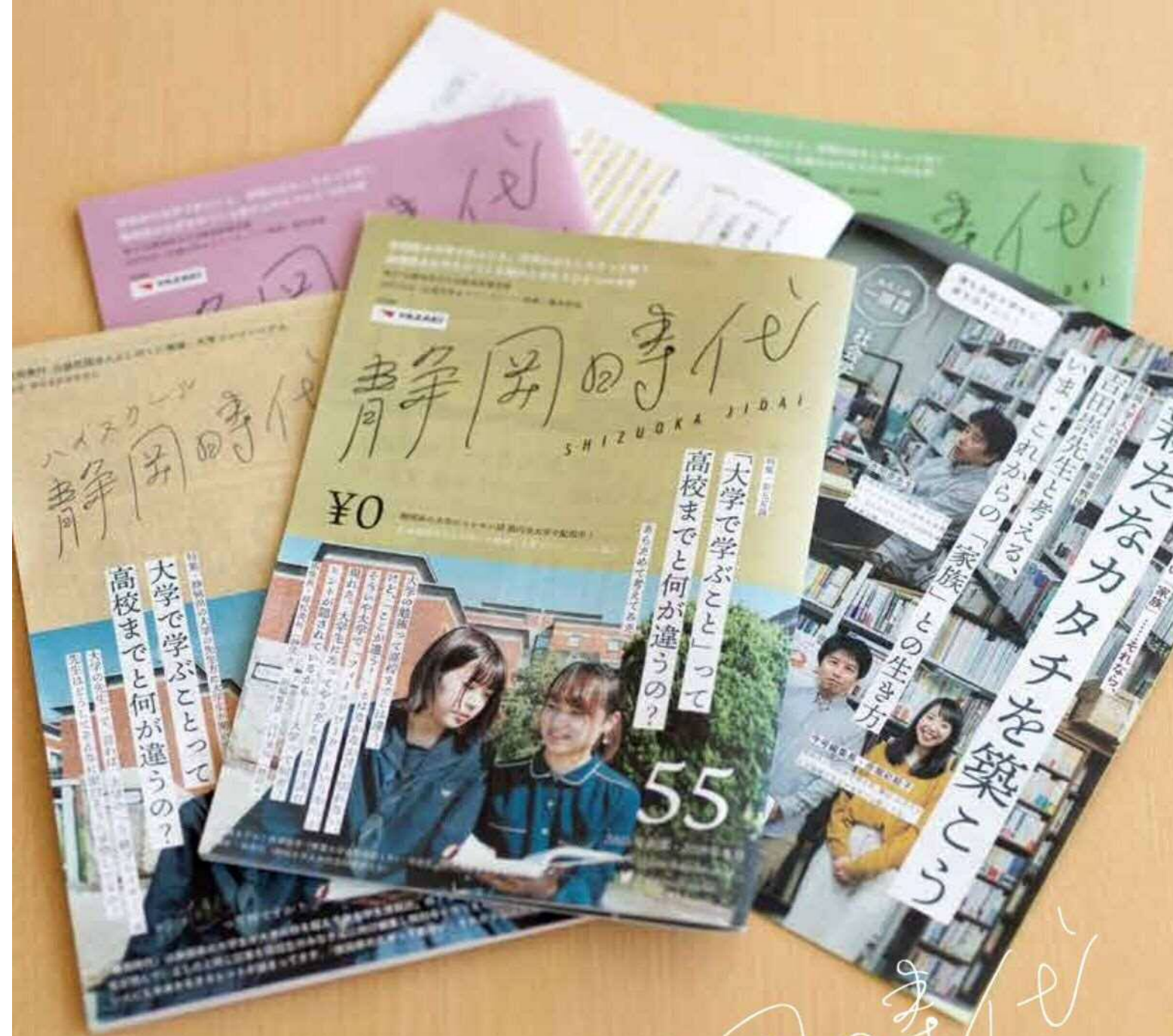


特集および連載ページの担当者の発表、各ページ担当者間での引き継ぎ作業、取材先の候補出し、進行状況の確認と全体での共有。時々笑い声上がるざっくばらんな雰囲気約2時間の編集会議は進む。編集部員は30人弱で、毎号実質20人前後が制作に関わっている。



大人になるまで、あと少し  
**「今、ここ」で  
 得られる学びを。**

大人になったとき、あなたはどこで暮らしているでしょう。  
 将来、振り返れば今こそが、あなたの「静岡時代」です。



静岡時代  
 SHIZUOKA JIDAI

**静岡時代**

2005年創部、2006年「静岡時代」創刊（当初は静岡大学の任意団体として発足）。静岡県の大学生が取材・編集を行う。現在は季刊、毎号1万部を発行。県内の全大学で配布中。第27回静岡県文化活動奨励賞受賞、SFF2014（全国学生フリーペーパーの祭典）最多評価。その他にも学生向けの出版物を制作する。

取材レポート 『静岡時代』編集部



澤口 翔斗さん  
さわぐち しょうと

静岡大学 人文社会科学部  
社会学科4年 藤枝市出身

90%!

### 教授も勉強中。「疑う力」が備わる

全部を教えてはくれないのが大学。答えへの最短距離を探すのが高校の学びで、大学では先生も現在進行形で学んでいる最中。だから学問の入り口を示すだけで「その先は自分で行け」と。もう一つは、批評というか疑う力がつくのが大学。答えがないから新しい視点が備わり、社会や周囲を批評できるようになるのかも。



吉田 汐里さん  
よしだ しおり

静岡県立大学 国際関係学部  
国際関係学科2年 北海道出身

25%!

### 世界が突然、違って見える

大学での勉強って答えがない。分かるものも分からないものも、先生の話全部受け止めて、脳をフル活用。分からないものは頭の中に持って置いて、あるとき突然解決することもある。視点がガラッと変わるみたい。大学に入ってそれにすごく感動して。自分の無知さにも気付いたし、勉強という言葉の意味が変わりました。



藤田 智尋さん  
ふじた ちひろ

静岡県立大学 国際関係学部  
国際言語文化学科3年 藤枝市出身

ほぼ100%!

### 学問は実用的とは限らない

日本文化専攻なので授業で源氏物語や古事記を扱ってんですけど、社会に出たらそんなの基本無駄(って言っちゃアレだけど)。でも(大学では)それが許される。そういう話をする場があるということが、すごくうれしい。この前、居酒屋で部長と源氏物語の話題で盛り上がり。そういうことが楽しいし、うれしいと思う。



林 優介さん  
はやし ゆうすけ

静岡大学 人文社会科学部  
言語文化学科2年 岐阜県出身

80%!

### 受け身で学ぶか、自ら学ぶか

能動性が全然違いますよね。学ぶ側に学ぶ理由がちゃんとあって、勉強に対して能動的なのが大学。高校は大学での勉強の土台となる知識を習得するところ。大学はその土台を基にして専門分野を追究していくところ。大学での学びは絶対不可欠なものではないけれど、それによって何かの力が備わるのだと思います。

高校での勉強と、  
大学での勉強。  
その違いは  
何ですか？

### 編集部員のこたえ

取材に同行させてもらった  
5人の学生に聞きました

学生生活において  
『静岡時代』が  
占める割合



谷 充代さん  
たに みつよ

静岡大学 人文社会科学部  
言語文化学科3年 北海道出身

75%は学業、  
アルバイト、趣味

### 大学は考える力を養う場所

高校までの勉強は次に進むための手段としか捉えてなくて、ゲーム感覚でしていた感じ。大学での勉強は手探りで、問題集も参考書もない。指標は教授の視点くらいで、考え方は自分に任せられてる。その面白みは高校とは全然別物です。それって人生にもつながることで、考え方を身に付ける場所が大学なのだと思います。



東海大学海洋学部の研究室を訪ねて、生物多様性や環境の面から見た「暮らし」について、環境社会学の教授に取材。



人生初の自分の名刺  
取材時の挨拶で  
使います!



暮らしとデザインの関係について、浜松の繊維商社に勤める編集部OGに静岡市内で取材撮影。

「自分が予想もしない視点で世界を見ている人と会い、話を聞き、解釈して文章を書き、世の中に送り出すという流れを経験できる。すごい貴重」「この小冊子を手にした人が何かを感じ取ってくれたらうれしい」と編集部員たち。

学問分野を横断して身近な物事を深く考察する取材編集経験。それはまさしく学びの実践に他ならない。

「ハイスクール静岡時代」というフリーマガジンを学校で手に取ったことがあるだろうか。進学や就職を機に地元を離れる若者が多いなか、静岡県で学ぶことの魅力を伝えようと、県内の大学生たちが年1回、高校生に向けて作っている。

『静岡時代』はその派生元で姉妹誌の大学生向けフリーマガジン。企画、取材、執筆、配布まで全て学生たちにより発行されている。

### 編集現場にお邪魔した。

毎週水曜日の夜7時。静岡市繁華街の貸し会議室で編集会議が開かれる。さまざまな大学の学生が交流するいわゆるインカレ(インターカレッジ)編集部で、現在のメンバーは静岡大学・静岡県立大学・静岡英和学院大学・常葉大学の学生たち。

まずは前号の配布状況の報告から始まり、その後、次の発行号の内容についてガヤガヤと話し合う。

同誌には掟が二つある。一つは「多数決禁止」。編集長は企画に強い意思を込め、皆を引っ張り一冊にまとめ上げねばならない。